

## 地図を書く清永先生

堀越孝一

清永昭次先生がお引きになる。なんとねえ、金沢誠先生がお引きになられたのがついこのあいだのことだったではありませんか。そう、たしかにあれからいろいろなことがありました。福井先生がいらっしゃった。金沢先生が亡くなられた。柳田先生がお引きになりました。まだまだありました。かぞえあげるのもむなし。そういういろいろあったなかで、清永先生はいつもいらっした。わたしが史学科にきたとき、清永先生はもう十年以上も前から史学科にいらっした。だからいつも、いつまでもいらっしやるのだろうと、なにかゆるんだ心づもりがわたしにあったようです。それがもういらっしやるなくなるといふ。だからいふのです、なんとねえ、金沢先生がお引きになられたのがついこのあいだのことだったではありませんか。

金沢先生は「すしよし」でトロをエנקロージャーなさって笑いをさそってくださった。清永先生はわたしはお酒は飲めませんからとおっしゃって、わたしがはじめてお会いたときからそうおっしゃりつづけて、それがお見受けするところ、かなりの量、召し上が

る。ひところは、お帰りの東横線はだいじょうぶだろうかと心配したものです。いいえ、相鉄線のことはい心配しませんでした。お乗り換えになられるころには、酔いも醒めていらっしやるでしょうからお人柄というのでしょうか、それぞれの持ち味があってたのしい。

学問のお話をしましょう。じつのところわたしは清永先生に大昔に会っている。わたしが茨城大学につとめるので水戸にいくまえですから、ずいぶんまえですねえ。『世界史講義』という、タイトルにあわず受験の参考書を書くということで三省堂の、あれは倉庫ではなかったのかなあ、迷路のような廊下をたどってたどりついた部屋に清永先生がいらっした。清永先生のご分担はギリシアで、ですから先生はギリシア史のご専門だとあのころから承知していた。

それがあまりまじめに先生のお書きになるものは読まなかった。正直なところで、それに先生のお書きになるスタイルはどうもわたしのなかですりぬける。すりぬけざまにそのまま読まずになっちゃったお仕事がかなりあります。こんど座り直して読みました。読み方はずいぶんと自分勝手なもので、なんとわたしが史学科にきた

年に先生が研究年報にお書きになった「第一次メッセニア戦争後のスパルタと戦争」という、ちょっとかわったタイトルの論文を手にとる。それからわたしが一緒していなかったころのものと、一緒に緒してからのものと、いくつか拾い読みして、そこにひろがる景色を眺める。そういう読み方です。

「われらの父たちの父たち」とかいう詩のフレーズがあって、さてこれをどう読むか。父祖と読むか、祖父と読むか。コトバのいたずらではありません。それが問題だ。わたし好みの書き出しで、おもしろそうだ。アリストテレスの『ポイエティケー』を思い出す。普遍を語るポイエシスに個物を語るイストリアを根づかせようとなさっている。そんな印象で、清永先生とその先学同行はイストリアに与する。それはもうていついて、「以上が第一次メッセニア戦争終結後、前六世紀なかばごろまでのスパルタが経験した戦争と、その年代的布置の大略である」と清永先生は満足そうに稿を結びます。

「年代的布置」とはよくいうよ。そんな感じで、くわえて「ハクスレーはブルタルコスの記事をエウポイアのケリントスに訂正し」とお書きになる。いいえ、あたっているかあたっていないかではありません。いってみれば「空間的布置」に寄せる清永先生とその先学同行の方々の熱情はどうだろう。さわればやけどしそうです。

清永先生のお部屋に大きなギリシアの地図がかかっている。なんでも学生のはなしでは、教室では、先生、まず黒板にギリシアの地図をお書きになる。時間の半分はそれでつぶれますと、わたしにそ

のはなしをしてくれた学生は大仰に肩をすくめてみせたものです。わたしの女ともだちのマダム・ファンタジーの奔放なまなざしに、清永先生、ていねいにていねいにお書きになって、満足そうにためいきをつかれて、これがギリシア本土です。コリントスはここですね。ハクスレーはブルタルコスの記事コリントスを、ここがエウポイアです、エウポイアのケリントス、ここです、ケリントスに訂正しました……なんとまあ、大ブルタルコスのペイリオグラフィに無垢な学生を案内なさろうとか。

なんとねえ、清永先生、来年度から西五の二、三階の教室にも実物投影機なるものを設置しようと、いま教務がシャカリキになっていますよ。地図帳をライトの下に置くと、巨大なスクリーンに地図が投影されるという仕組みです。先生のお仕事を奪う仕掛けですねえ。よかった、先生はそんな邪悪な機械仕掛けに妨げられることなく、めでたく黒板に地図を書き終えられて、教室を去られた。